

序論

言い回しというのは話の話題に婉曲なるように、会話をそらす行事である。ワイツマンはトマスに(1998; 145) によって、間接的な言い回しを以下のように説明する：

耳慣れない語を使うのか、何を指しているのかがあいまいな指示語を使うとかのために明瞭性が欠けるだけでなく、発話そのものの意味とは（なんらかの点で）異なる意味を伝える目的で、「特別に」そして「意図的に」話し手によって用いられる明瞭性の欠如も「間接性である」。ここで重要なのは、話し手の意味と発話そのものの意味の間の「ギャップ」を「意図的に」活用するという概念である。

言い回しをするのは間接に気持ちを伝えるだけではなく、また、直接発話で相手を傷つけないためでもある。しかし、グライスは小泉に様態の公理の理論 (1993, 311-312) と違って、このように説明する：

様態の公理 ： 明確に、簡潔に、順序立てて話す。

水谷 (1995; 24-25)とトマス (1995; 24-25)によって、言い回しの行う状況が一般的に「誘い」、「断り」、「依頼」、「苦情」と「タブー」の有無である。

語用論の中は前提と含意の理論がある。第 3 話のデータを語用論の理論と前提の理論と含意の理論で分析される。小泉 (1993; 281) は語用論をこのように説明する：

語用論は語の用法を調査したり、検討したりする部門ではない。言語伝達において、発話はある場面においてなされる。発話としてののぶんは、それが用いられる環境の中で初めて適切な意味をもつことになる。

フレーゲは小泉に(1993; 323) 前提をこのように説明する：

G. フレーゲは「肯定文もその否定文も同じ前提の組を共有する」と述べているが、前提は文を肯定から否定に換えても生き残る含意である。要するに、文の中に現れる固有名詞は前提と認めてよいのである。

グライスはトマスに(1998; 63)このような含意を説明する：

「もう 1 つの意味」、あるいは「別の意味」が相手に伝われるのは、含意 「implicature」という手段によってである。

筆者は次の課題に立って研究を進める：

1. 言い回しは公理と同意するか。
2. 日本の言い回しはどんな前提と含意があるか。

本論

研究の結果から言い回しは5種類で区別できる。それは「誘い」、「断り」、「依頼」、「苦情」と「タブー」。しかし、筆者はタブーのデータを見つけられなかったので、4つの言い回し種類だけを研究した。

1. 誘い

そうだ。葵ちゃん、これからどこかに行かない？今日の授業もうおしまいなんだ。

間接的な誘いをする場合、このような誘いは肯定できる言い回しである。話し手から聞き手に間接的な誘いがあるからである。間接的な誘いの決定権は聞き手にある。もちろん、このような誘いは様態の公理に反則である。

2. 断り

A:今日の飲み会遅れずに来いよ。

B:悪い、今日急用が出来て.....

間接的な断りをする場合、何か曖昧に伝えることがあるので、これが様態の公理に反則である。しかし、言い回しによると、間接的な断りは肯定できる言い回しである。日本では直接的な断りは失礼である。

3. 依頼

私.....私、薫様にもう一度会って伝えたいことがあって..... 雅さんから逃げてきたのですが、道に迷ってしまって.....

間接的な依頼をする場合、このような依頼は決定できる言い回しである。しかし、様態の公理によると、間接的な文を話すのは様態の公理の反則である。

4. 苦情

友人との付き合いも結構ですが、葵様の気持ちをちゃんと理解してくださいと困ります..... 葵様は薫殿の帰りを待って、昨晚から何も口にしてないのですよ。

苦情は両方とも肯定できる。但し、苦情を伝える時曖昧で言わず、聞き手を傷つけず咎めて、失礼を避けるため言い回しの関数を使う場合に限る。

例 “そうだ。葵ちゃん、これからどこかに行かない？今日の授業もうおしまいなんだ。” “これから” の言葉が持つ前提があって、その二人は先にもう何かをやりました。それに“一ちゃん”の呼び方にも含意があって、その二人の関係が近いである。

結論

様態の公理は直接に何かを伝えるのは間接より丁寧である。しかし、日本社会では間接で何かを伝えることが丁寧であり、したがって言い回しは日本では一般的なことである。これらから推測すると丁寧さは相対的である。日本社会では言い回しを尊重し、様態の公理と矛盾している。

前提は一般的に話し手が何かを伝える文を前提する。前提の意味は文が否定形にされていても正しいままになる。それに、含意は一般的に話し手と聞き手だけに知られているものを含意されている。各会話の中にコンテキストがあることは理解できる。

DAFTAR ISI

Kata Pengantar.....	i
Daftar Isi.....	v
Bab 1 Pendahuluan.....	1
Latar Belakang Masalah.....	1
Rumusan Masalah.....	6
Tujuan Penelitian.....	6
Metode Penelitian.....	7
Teknik Penelitian.....	7
Organisasi Penelitian.....	8
Bab 2 Kajian Teori.....	11
Pragmatik.....	11
Praanggapan.....	14
Implikatur dan Maksim Cara (Kesopanan).....	16
言い回し (<i>Ii Mawashi</i>).....	20
Definisi.....	21
Macam-macam 言い回し (<i>Ii Mawashi</i>).....	23
Fungsi 言い回し (<i>Ii Mawashi</i>).....	26
Bab 3 Analisis.....	29
誘 (<i>Sasoi</i>).....	30
断 (<i>Kotowari</i>).....	41
依 (<i>Irai</i>).....	51

苦情 (<i>Kujou</i>).....	62
Bab 4 Kesimpulan.....	76
Sinopsis.....	vii
Daftar Pustaka.....	xii
Lampiran.....	xiv
Riwayat Hidup Penulis.....	xlix